

教会ラテン語におけるgerundium, gerundivumおよび接続詞quodの用法について

その他（別言語等） のタイトル	De Modo Utendi Gerundio, Gerundivo et Conjunctione <quod> in Latinitate Ecclesiastica
著者	大出 哲
雑誌名	室蘭工業大学研究報告
巻	4
号	3
ページ	711-730
発行年	1964-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3210

教会ラテン語における gerundium, gerundivum および接続詞 quod の用法について

大 出 哲

De Modo Utendi Gerundio, Gerundivo et Conjunctione 《quod》 in Latinitate Ecclesiastica

Satoshi Ôide

Epitome

Latinitas ecclesiastica differt a latinitate antiqua in eo quod illa habet majorem flexibilitatem quam haec. Ab initio, ipsa latinitas natura sua habebat magnam flexibilitatem in potentia. Id quod hanc potentiam duxit in actum, est philosophico-theologica investigatio. Unde hoc subjectum debet investigari per omnes libros patrum auctorumque ecclesiasticorum. Sed hoc est supra vires meas. Hic igitur in lucem fero meam investigationem, etiamsi non sit sufficiens. Puto enim quod investigatio mea sit utilis eis, qui incipiunt legere libros latinitate mediaevali scriptos.

ラテン語の文法を一通りすませて中世の書物を読もうと意気込むとき、誰しも面喰らうことは、動詞の活用表にのっていない形態——たとえば *ens*——や、文法書に説明されていない用法——たとえば、接続詞 *quod* の用法——が無闇矢鱈と飛び出してくることである。おまけに、辞書を引いてみても見当らない単語のあまりにも多いことがそれに拍車をかけて、若い学徒の意気を消沈させる。中世研究のふるわない一つの原因でもあろう。辞書に見当らない単語のほうは S. Thomas Aquinatis『神学大全』の索引その他にひとまずまかせるとして、浅い体験から、中世の書物を読むために重要と思われる文法の説明を二三試みようと思い立った所以である。

[I]

中世以降におけるラテン語の文法は、古代のそれを泉として、それから奔放とも見える自由さをもって豊かに流れ出る。哲学的神学的思索がそうさせるのである。*esse* を例にとれば、中世以降における存在論の多彩な展開は、周知のように、古代には影をひそめていた現在分詞 *ens* を形容詞として名詞として頻繁に使用し、さらに、*entitas*「存在性」という抽象名詞を造る。Nicolaus de Cusaにおいては、*esse* から *essentiare*「存在を与える」という動詞が新造されている。

spiritus essentiens. Nicolaus de Cusa, De Non Aliud, XXIV 《存在を与える霊》
 esse の gerundium も古代には見出されない形態の一つであるが、S. Thomas においては、
 その属格が次のように使用されている。

Esse dupliciter dicitur: uno modo, significat actum *essendi*; alio modo, significat compositionem propositionis, quam anima adinvenit coniungens praedicatum subiecto. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 3, art. 4 ad 2. 《「存在」は二様の意味で言われる。一方の意味では、それは、「存在という現実態」を表示するが、他方の意味では、それは、知性が述語を主語に結びつけるときに見出すところの、「命題の構成作用」(命題の copula「繫辞」)を表示する。》

Substantia sua adest omnibus ut causa *essendi*. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 8, art. 3 ad 1. 《かれ(神)の実体は、存在の原因として、万物に現存する。》

esse の gerundium のこうした用法は、Nicolaus de Cusa においても多く見出される。

diversi modi *essendi*. Nicolaus de Cusa, De Docta Ignorantia, II, 9. 《相異なる存在の仕方》

forma et actus *essendi*. Nicolaus, Doc. Ig., I, 23. 《存在の形相と現実態》

forma *essendi*. Nicolaus, Doc. Ig., I, 23. 《存在の形相》

unitas *essendi*. Nicolaus, Doc. Ig., I, 20. 《存在の一性》

possibilitas *essendi*. Nicolaus, Doc. Ig., II, 1. 《存在の可能性》

universalis *essendi* modus. Nicolaus, Doc. Ig., II, 7. 《普遍的な存在の仕方》

essendi forma possibilis sensibilisque substantiae. Nicolaus, De Non Aliud, XII
 《可能的で感覚的な実体の存在の形相》

さらに、*essendi* は、それを修飾限定する副詞と共に用いられる。

modus *essendi sic vel sic*. Nicolaus, Doc. Ig., II, 12. 《かくかくの存在の仕方》

Nicolaus de Cusa において特に注目しなければならないことは、*essendi* が意味上の主語をとる場合があることである。

Deus est aequalitas *essendi omnia*. Nicolaus, Doc. Ig., III, 3. 《神は、万物の存在の相等性である。》

omnia の格は対格でなければならない。つぎの用例を見出すからである。

possibilitas *essendi aquam*. Nicolaus, De Non Aliud, VII. 《水の存在の可能性》

では、この対格をどう説明すればよいのだろうか。わたしは、つぎの見解をとりたい。まず、「われわれは水が存在するのを見る」(Videmus aquam esse) という accusativus cum infinitivo の構文をもつ文章を想定してみる。そして、この「水が存在すること」(aquam esse) の可能性、という意味を表示するために、accusativus cum infinitivo の構文における不定法の意味上の主語 aquam をそのままにしておいて、esse だけを gerundium の属格に変えたのであろう。同

じ用法を次に挙げてみよう。

quaedam absoluta *omnia essendi* possibilitas. Nicolaus, Doc. Ig., II, 8. 《万物が存在するための或る絶対的な可能性》

aequalitas summa atque maxima *essendi omnia*. Nicolaus, Doc. Ig., III, 3. 《万物の存在の最高で最大な相等性》

[Deus] est aequalitas *essendi res*. Nicolaus, Doc. Ig., I, 24. 《神は、諸事物の存在の相等性である。》

Praesentia est cognoscendi principium et *essendi omnes temporum differentias atque varietates*. Nicolaus, De Non Aliud, XVI. 《現在性が、時間のいっさいの差別と多称性との認識と存在の原理である。》

また, Nicolaus de Cusa においては, esse の gerundium の対格が, つぎのように副詞をとめない, 前置詞 ad と共に用いられて目的を表わしている。

Res actu *ad sic essendum* per ipsum talem motum seu spiritum determinatur. Nicolaus, Doc. Ig., II, 10. 《事物は, このように存在するためには, 現実には, このような運動すなわち霊によって限定される。》

ad と共に用いられる esse の gerundium は, 意味上の主語をとるとき, gerundivum に転換される。これは, 対格の目的語をもつ gerundium が ad と共に用いられるとき gerundivum に転換されねばならないことからの類推であろう。

Possibilitas *ad essendum mundum istum tantum* aptitudinem habuit. Nicolaus, Doc. Ig., II, 8. 《可能性は, この世界だけが存在するための適応性しかもっていなかった。》

Contractio dicit ad aliquid, ut *ad essendum hoc vel illud*. Nicolaus, Doc. Ig., II, 4. 《縮限とは, (普遍が), たとえば, このものとして存在するにいたるとかあのものとして存在するにいたるとかいうように, 或る特定の事物として存在するにいたることを意味する。》

Contrahens est adaequans possibilitatem *ad contracte istud vel aliud essendum*. Nicolaus, Doc. Ig., II, 7. 《縮限するものは, 可能性を規定して, 縮限されてこのものあるいはあのものとして存在するにいたらしめるものである。》

Balthasar Corderius においては, verbum defectivum 《aio》の gerundium が見出される。

Qui philosophatur de Deo *aiendo*, Verbum facit carnem; qui vero neganter, auferendo philosophatur, Verbum facit spiritum. PG 3, col. 1010, l. 17; De Mystica Theologia S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae. 《神について肯定することによって哲学するひとは, 御言葉を肉とする。しかし, 否定的に, 奪取することによって哲学するひとは, 御言葉を霊とする。》

[II]

中世以降におけるラテン語の *gerundium* と *gerundivum* の用法にかんして言えば、古代のそれよりも著しく柔軟性を増し、後述のように破格的な用法も出てくる。

(1) *gerundium* は、その動詞が定動詞として使用されるとき支配する格をそのまま支配し、定動詞として使用されるとき共に用いられる前置詞との関係をそのまま持続する。

Deus creando omnia semetipsum multis modis manifestat. PG 3, col.1010, 1.48; *Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae.* 《神は、万物を創造することによって、自分自身を多くの仕方であらわにする。》

ad divina accedendi via. Nicolaus, Doc. Ig., I, 11. 《神的なことがらへと近づいていく道》

omnis circulatio, quae est [eundo] de potentia in actum et redeundo de actu in potentiam. Nicolaus, Doc. Ig., I, 21. 《可能態から現実態へと行くことによって、そして、現実態から可能態へと復帰することによって存するところの・いつさいの円環》
Oportet in divinis simplici conceptu, quantum hoc possibile est, complecti contradictoria, ipsa anteceder praeveniendo. Nicolaus, Doc. Ig., I, 19. 《神的なことがらにかんしては、矛盾するものどもを——先に進んでそれらを追い越すことによって——可能なかぎり単純な概念のうちに包括しなければならない。》

Finitis uti pro exemplo volums ad maximum simpliciter ascendendi. Nicolaus, Doc. Ig., I, 12. 《われわれは、有限なものを、端的に最大なものへと登るための例として使用することを欲する。》

Perfectum videtur dici aliquid in attingendo ad propriam naturam. S. Thomas, *Expositio in Librum Beati Dionysii De Divinis Nominibus*, Exp. 115. 《或るものは、固有の本性に到達することにおいて、完全なものと言われるように思われる。》

(2) *credere, videre, dicere* のような動詞の *gerundium* は、それが定動詞として使用される場合と同じように、*accusativus cum infinitivo* の構文をとる。

Terra, luna et planetae sunt ut stellae circa polum distanter et differenter motae, coniecturando polum esse, ubi creditur centrum. Nicolaus, Doc. Ig., II, 11. 《地や月や諸遊星は、ひとびとが中心だと信じている所が極であると臆測するかぎりにおいて、諸恒星のようにこの極の周囲を、極から或る距離をもって、差別ある仕方運動している。》

Unde, demonstrando Deum esse per effectum, accipere possumus pro medio quid significet hoc nomen 《Deus》. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 2, art. 2 ad 2. 《したがって、われわれは、神が存在することを結果によって論証するにあたって、その媒介として、「神」というこの名詞が何を表示するかを受け容れることができる。》

B. Corderius においては、*dicere* の *gerundium* が、*verbi gratia* によって引き出される例文

を目的語としてとっている。

Oportet omnes entium affirmationes de divinitate magis proprie negare, *dicendo verbi gratia Deus non est vita, non est sapientia, etc.* PG 3, col. 1007, 1.57; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae. 《神性についての・存在するものどものいっさいの肯定を、もっと固有な仕方でも否定しなければならない、例えば、「神は生命でない」「神は叡智でない」などと言って。》

(3) 対格の目的語をもつ gerundium が属格に置かれるとき、および、前置詞にともなわれない奪格に置かれるとき、その gerundium は gerundivum によって置換されうる。この場合、gerundium に支配されていた対格の名詞は、gerundium が置かれるはずの格に置かれ、gerundivum はそれと性・数・格において一致しなければならない。しかし、この置換は必ずしも必要ではない。

principale exemplar *creandi res*=principale exemplar *creandarum rerum*. Nicolaus, Doc. Ig., I, 11. 《創造さるべき事物の第一の原型》

Scio Christum *legendo Sacram Scripturam*.=Scio Christum *legenda Sacra Scriptura*. 《聖書を読むことによって、わたしはキリストを知る。》

ただし、目的語が中性代名詞の対格であるときには、上の置換はなされない。

Puer est cupidus *aliquid scribendi*. 《子供は、何かを書こうと欲している。》

Aliae scientiae non argumentantur ad sua principia probanda, sed ex principiis argumentantur *ad ostendendum alia in ipsis scientiis*. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 1, art. 8 cor. 《他の諸学は、自分の基本命題を証明するために論証を行なうのではなく、かえって、基本命題から出発して、その学自身のうちにある・基本命題以外のことがらを明らかにするために論証を行なうのである。》

(4) gerundium の gerundivum による置換は、古代ラテン語の文法においては、対格の目的語をもつ gerundium が (a) 与格に置かれるべき場合、(b) 対格に置かれるべき場合、(c) 前置詞と共に奪格に置かれるべき場合には、必ずなされねばならないことになっている。だが、中世になると破格的な用法が見られる。

(a) の例

allegoria pulcherrima et appositissima *iis quae tractantur illustrandis*. PG 3, col. 1014, 1.24; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae. 《いま論じられることどもを明らかにするために最も美しい最も都合な比喩》

haec theologiae pars, quae *Scripturis explicandis* vacat. PG 3, col. 1035, 1.21; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae. 《もっぱら聖書の解釈だけを旨とする神学のこの部分》

Nihil est in rebus, quod non sit *virtuti alicui percipiendae* idoneum. Nicolaus, De Non Aliud, XIV. 《どんな力をも認知する能力のないものは、諸事物のうちには

何もない。》

(b) の 例

Deus omnipotens supremas animae vires *ad sui capessendam similitudinem* (puta gratia et dona sua) condidit. PG 3, col. 1007, 1.34; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae. 《全能な神は、靈魂の最上な力を、かれ自身の類似（例えば、かれの恩寵や贈物）を捕えるようにつくった。》

Ad intelligendum id quod dictum est, quomodo scilicet caligo sit illuminatio, et nescientia cognitio, sume, inquit S. Maximus, exemplum ab oculo corporis. PG 3, col. 1026, 1.13; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 2, Corderii Notae. 《いま言われたこと、すなわち、どのような仕方で闇が照明であり、無知が認識であるかを理解するために、肉体の眼から例を取られよ、と S. Maximus は言う。》

Quia a Deitate Trinitatis nihil subtrahi potest, *ad hoc significandum* addidit: 《integralis》. S. Thomas, Expositio in Div. Nom. Exp. 115. 《三位一体という神性からは何ものも取り除かれえないがゆえに、このことを表示するために、かれは、「完璧な」を付け加えたのである。》

Deus *propter suam cognoscendam bonitatem* aut ex eo, quia maxima absoluta necessitas, creavit mundum. Nicolaus, Doc. Ig., II, 2. 《神は、自分自身の善性を認識するために、あるいは、かれが最大で絶対的な必然性であるという理由によって、この世界を創造した。》

しかし、S. Thomas においては、これの破格的な用法が多く見られる。

Invenimus Deum laudari sicut Trinitatem *ad manifestandum supersubstantialem fecunditatem* trium personarum, quae non distinguuntur nisi secundum originem.

S. Thomas, Expositio in Div. Nom. Exp. 57. 《起源に基づいてのみ区分される三つのペルソナの超実体的な生殖性を明らかにするために、神が三位一体として讃美されるのを、われわれは見出す。》

Hoc nomen 《perfectum》 assumptum est *ad significandum omnem rem* quae attingit propriam virtutem et naturam. S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 114.

《「完全なもの」というこの名称は、固有な能力と本性とに到達する事物をすべて表示するためにとられている。》

しかも、同一項 (articulus) のなかに、対格の目的語をもつ gerundium が gerundivum によって置換されている場合とない場合とが見出される。

Haec doctrina non argumentatur *ad sua principia probanda*, quae sunt articula fidei; sed ex eis procedit ad aliquid aliud ostendendum. …… Si vero adversarius nihil credat eorum quae divinitus revelantur, non remanet amplius via *ad probandum articulos* fidei per rationes, sed *ad solvendum rationes*, si quas inducit, contra fidem. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 1, art. 8 cor. 《この教え（聖教、神学）も、自分自身の基本命題、すなわち、信仰箇条を証明するために論証を行うのではなく、かえって、それから出発して、それとは別な何かを明らかにするために進んでいく。

……しかし、もし反対者が、神から啓示されていることがらの何ものをも信じないならば、もろもろの信仰箇条を条理によって証明するための道は、もはや残っていない。だが、もし反対者が信仰に反する論説を持ち込んでくるならば、それを解決するための道は残っている。》

(c) の 例

illa quae in Scripturis explicandis versatur theologiae pars. PG 3, col. 1035, 1. 19; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 3, Corderii Notae. 《聖書解釈にかんする・神学のあの部分》

Dionysius dicit se eam [theologiae partem], quae *in Scripturis interpretandis* tota fuisse videtur, conscripsisse. PG 3, col. 1035, 1.20; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 3, Corderii Notae. 《Dionysius は、すべてが聖書解釈のためにであったと思われる神学のあの部分を、自分が書いたと言っている。》

Sufficiant ista pauca *pro mirabili potestate doctae ignorantiae ostendenda.* Nicolaus, Doc. Ig., II, 1. 《知ある無知の驚くべき能力を示すためには、いま述べたわずかなことだけで十分であろう。》

(5) 前置詞に先立たれない *gerundium* の奪格は、古代においては、主として手段・原因を示すために用いられたが、中世以降においては、限定を示すためにも多く用いられている。

Theologia mystica res creatas omnes quae quasi Deo circumpositae sunt, ab eo removendo et negando, ipsum quodammodo nobis in semetipso nudum exhibet. PG 3, col. 1027, 1.25; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 2, Corderii Notae. 《神秘神学は、いわば神のまわりにおかれている被造物をすべてかれから遠ざけ否定することによって、神をそれ自身においてあらわにして、或る程度われわれに示すのである。》——手段

Haberi etiam potest aliqua de Deo notitia intellectualis mystica abstractiva et absoluta, abstrahendo ipsum esse ab omni prorsus imperfectione, accipiendoque illud cum omnimoda excellentia, nobilitate et perfectione, ac perfectionali infinitate. PG 3, col. 1058. 1.48; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 5, Corderii Notae. 《存在それ自体を全くの不完全性から抽象することにより、また、それを全くの卓越性・崇高性・完全性・完全な無限性ととも受け容れることにより、知性的・神秘的・抽象的・絶対的な・神についての或る観念がもたれうる。》——手段

Quando dicitur Deum alia ratione creasse hominem, alia lapidem, verum est habendo respectum ad res, non ad creantem. Nicolaus, Doct. Ig., II, 9. 《神が或る概念によって人間を創造し他の概念によって石を創造したと言われるとき、このことは、事物にたいする関係をもつかぎりでは真であるが、創造するものにたいする関係をもつかぎりでは真ではない。》——限定

Hoc etiam alio nomine natura dicitur, accipiendo naturam secundum primum modum illorum quatuor quos Boetius in libro 《de Duabus Naturis》 assignat. S. Thomas, De Ente et Essentia, cap. 1, num. 3. 《これ(本質)は、別な名称によって本性とも言われる、Boetius が『二つの本性について』の書であげているあの四つ

の意味のうちの第一の意味にしたがって本性を受け容れるかぎりにおいて。》——限定

(6) S. Thomas の『神学大全』をひもとくとき、各項 (articulus) ごとに必ずぶつかるものに、gerundivum の非人称的用法がある。Respondeo dicendum quod ……「以上に答えて、わたしはこう言うべきであるとする」という、主文 (corpus articuli) を引き出す句、および、Ad primum ergo dicendum quod ……「第一の (異論) にたいしては、それゆえ、こう言うべきであるとする」等々という、異論解答 (solutio) を引き出す句がそれである。S. Thomas においては、きわめて稀に、この非人称的用法は、accusativus cum infinitivo の構文をとる。

Respondeo dicendum *sacram doctrinam esse scientiam*. S. Thomas, S. Th., Ia. q. 1, art. 2 cor. 《以上に答えて、わたしはこう言うべきであるとする。聖教は学である。》
 Respondeo dicendum *absolute Deum non esse corpus*. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 3, art. 1 cor. 《以上に答えて、わたしはこう言うべきであるとする。絶対に神は物体ではない。》

B. Corderius にも、この構文が見出される。

Dicendum est, *nos Deum in hoc saeculo non posse intuitive cognoscere*. PG 3, col. 1058, l.37; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 5, Corderii Notae. 《われわれはこの世において神を直観的に認識することはできない、と言わねばなる。》

Hic notandum est, *positionem aliam esse simplicem, aliam esse hypotheticam*. PG 3, col. 1035, l.43; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 3, Corderii Notae. 《ここで注意すべきことは、措定は、或るものは単純であり、或るものは付帶的である、ということである。》

(7) gerundivum の非人称的用法は、間接疑問文とともに用いられる。

Ad horum difficultatem aperiendam dicendum est *quid nomine essentiae et entis significetur, et quomodo in diversis inveniantur, et quomodo se habeant ad intentiones logicas, scilicet genus, speciem, differentiam*. S. Thomas, De Ente et Essentia, cap. 1, num. 1. 《これら (存在と本質) の難解な点を明らかにするためには、本質と存在という名称によって何が示されているか、どのような仕方でそれらがいろいろなもののうちに見出されるか、どのような仕方でそれらが論理的な諸概念すなわち類・種・種差に対して関係しているか、これらのことが論じられねばならない。》

Viso igitur quid significetur nomine essentiae in substantiis compositis, videndum est *quomodo se habeat ad rationem generis, speciei et differentiae*. S. Thomas, De Ente et Essentia, cap. 3, num. 13. 《本質という名称によって合成実体において何が意味されているかということが見られたわけであるから、こんどは、どのような仕方でそれが類・種・種差という概念に対して関係しているかが考察するべきである。》

Secundo videndum est, *qualiter iste radius dilatetur in consideratione beneficiorum commissorum, quae quidem sunt in triplici genere*. S. Bonaventura, De Triplici Via, cap. 1, §2, num. 11. 《第二に、(知性の) この光が、まさに三様の種類において

存するところの・与えられた恩恵を考察することにおいてどのような仕方で広げられていくか、ということが見られねばならぬ。》

[III]

接続詞 quod によって導かれる名詞節は、古代のラテン語においてすでにいろいろな仕方で使用されている。Caesar の De Bello Gallico から例をとろう。

- (A) *Quod vestra victoria tam insolenter gloriamini, quod que tam diu vos impune iniurias tulisse admiramini, eodem pertinet.* Caesar, De Bello Gallico, I, 14. 《おまえたちがこんなに傲慢におまえたちの勝利を自慢していることと、こんなに長い間おまえたちが罰を受けずに不義を働いていることに驚嘆することとは、同じことがらに属する。》

quod によって導かれる二つの名詞節は、pertinet の主語になっている。なお、eodem は代名詞ではなくて副詞であり、pertinet が単数なのは、「et, —que, atque (ac) によって二つ以上の主語が連結される場合は、述語動詞は複数になるか、あるいは、最も近い主語の数に一致するかである」という規則による。

- (B) *Quod multitudinem Germanorum in Galliam traduco, id mei muniendi, non Galliae impugnandae causa facio; eius rei testimonium est quod nisi rogatus non veni, et quod bellum non intuli, sed defendi.* Caesar, De Bello Gallico, I, 44.

《わたしが多数のゲルマーニー人をガリアへと連れこむこと、それを、わたしは自分を守ろうという理由でしたのであって、ガリアを襲おうという理由ではたではない。このことの証拠は、わたしは乞われなければ来なかったし、戦いをしかけたのではなくて防戦したのである、ということである。》

名詞節 quod multitudinem …… と代名詞 id とは appositio の関係にあり、ともに facio の目的語となるために対格に置かれている。quod nisi …… と quod bellum …… とは、ともに eius rei testimonium の述語になっている。

- (C) *Reperiebat etiam in quaerendo Caesar, quod proelium equestre adversum paucis ante diebus esset factum.* Caesar, De Bello Gallico, I, 18. 《カエサルは、尋ねていくうちに、騎兵の敗戦が数日前になされたことを見出した。》

名詞節 quod は、reperiebat の目的語である。

- (D) *Id hoc facilius eis persuasit, quod undique loci natura Helvetii continentur.* Caesar, De Bello Gallico, I, 2. 《このことをかれ（オルゲトリクス）は、ヘルウェティー族が地勢上四方から制約されているという事情によって、かれら（ヘルウェティー族）にいつそう容易に説得しえた。》

代名詞 hoc と名詞節 quod とは appositio の関係にあり、理由・原因を示す奪格に置かれている。

- (E) *Hoc est miserior et gravior fortuna Sequanorum quam reliquorum, quod soli ne in occulto quidem queri neque auxilium implorare audent.* Caesar, De Bello Gallico, I, 32. 《セークァニー族の運命は他の部族どものそれよりもいっそう悲惨で困難である、かれらだけは隠れて歎いたり援助を切願したりすることがけっして許されないという、この点の相異によって。》

代名詞 *hoc* と名詞節 *quod* とは *appositio* の関係にあり、差異を示す尊格に置かれている。

- (F) *Helvetii, seu quod timore perterritos Romanos discedere a se existimarent, eo magis quod pridie, superioribus locis occupatis, proelium non commisissent, sive eo, quod re frumentaia intercludi posse confiderent, commutato consilio atque itinere converso nostros a novissimo agmine insequi ac lacessere coeperunt.* Caesar, De Bello Gallico, I, 23. 《ヘルウェティー族は、ローマ軍が恐怖に脅かされて自分たちから離れ去るのだと思ったのか——(ローマ軍が)その前日、あの高地を占領したにもかかわらず戦闘をしなかったということによって、なおさらそう思ったのか——、それとも、(自分たちによってローマ軍が)穀物の供給から遮断されうると信じたことによってか、その計画を変更して道を変え、わが軍を後衛から追撃し挑み始めた。》

代名詞 *eo* と名詞節 *quod* とは *appositio* の関係にあり、原因・理由を示す尊格に置かれている。

上述の接続詞 *quod* の用法も中世以降においては著しく柔軟性を増して発展し、きわめて多彩なものとなる。以下の用例においてうかがい知りうるところである。

- (1) *quod* 節が主語になる場合。

Sicut autem ex voluntate Dei dependet quod res in esse producit, ita ex voluntate eius dependet quod res in esse conservat. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 9, art. 2 cor. 《事物を存在へともちきたすことが神の意志に依存するのと同じように、事物を存在へと保持することはかれの意志に依存する。》

Quod Moyses cum selectis sacerdotibus montem ascendat, solusque caliginem ingrediatur, insinuat, paucorum esse ad mystica fastigia conscendere. PG 3, col. 1014, l. 33; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae. 《モーセが選ばれた祭司たちとともに山に登り、ただひとり闇へと歩み入ったということは、神秘的な頂上へと登るのは少数のひとにだけできることである、ということの意味する。》

Quod in contemplatione tam theologiae affirmativae quam theologiae negativae Deus vere et obiective intelligatur, hoc modo videtur probari posse: …… PG 3, col. 1050, l. 74; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《肯定神学の観想においても否定神学の観想においても、神が真に客観的に理解されることは、この仕方では証明されうと思われる。……》

Unde non potest esse quod malum significet quoddam esse, aut quandam formam seu naturam. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 48, art. 1 cor. 《したがって、悪が或る存在を、あるいは、或る形相すなわち本性を意味することはありえない。》

Quod in libro 《De causis》 assertitur, primam causam non narrari nisi per causas secundas, non est intelligendum, quasi nomina secundarum causarum proprie et

univoce convenient causae primae. PG 3, col. 1058, l. 60; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《「第一原因は第二の諸原因によってのみ語られる」と『原因論』において主張されていることは、あたかも第二の諸原因の名称が固有な仕方で一義的に第一原因に適合するかのように理解するべきではない。》

Hoc ipsum quod res convertuntur in Deum, desiderando Ipsum sicut finem, est eis a Deo. S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 100. 《諸事物が神を目的として希求することによって神へと転回するというこのことは、神から諸事物に与えられることなのである。》

なお, quod 節を主語にする場合, 代名詞を形式主語として文頭に置き, quod 節を後にもって来る配語法がある。

Hoc autem etsi possit dici de habente formam, quod scilicet habeat aliquid quod non est ipsum (puta in albo est aliquid quod non pertinet ad rationem albi): tamen in ipsa forma nihil est alienum. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 3, art. 7 cor. 《ところで, 自分自身でない或るものをもつということのことは, 形相をもっているものについては言われうるけれども (例えば, 「白いもの」のうちには, 「白」という概念に属していない或るものが存している), しかし, 形相自体のうちには, 形相以外の何ものも存していない。》

また, quod 節を文頭に置き, それをさらに代名詞で受けて主語にする場合がある。

Quod autem diversimode participetur, hoc evenit, quia probatum est superius non posse esse duo aequae similia et per consequens praecise aequaliter participantia unam rationem. Nicolaus, Doc. Ig., I, 17. 《ところで, 相異なった仕方で分有されるということのおこるのは, 上に証明されたところの・相等しく似ている二つのものはありえないということ, したがって, 一な根拠を厳密に相等しく分有している二つのものはありえないということのゆえにである。》

(2) quod 節が述語になる場合。

Caliginem autem vocat duplici de causa: Prima ratio est, quod Deum caliginem inhabitare Scriptura perhibeat. …… Secunda ratio est, quod unio huiusmodi cognitionis seu intellectionis (quae Dionysio lux est) *in seipsa expers sit.* PG 3, col. 1003, l. 71; col. 1006, l. 15; Myst. Th. S. Dionysii, Corderii Notae. 《ところで, かれ (Dionysius) は闇を二つの理由で呼んでいる。第一の理由は, 神は闇に住むと聖書が述べていることである。……第二の理由は, このような合一は, それ自身のうちに, (Dionysius にとっては光であるところの) 認識すなわち知解を欠いていることである。》

Unde impossibile est animae hominis secundum hanc vitam viventis, essentiam Dei videre. Et huius signum est, quod anima nostra, quanto magis a corporalibus abstrahitur, tanto intelligibilium abstractorum fit capacior. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 12, art. 11 cor. 《こうして, この世の生に従って生きる人間の靈魂にとっては,

神の本質を見ることは不可能である。このことの証拠は、われわれの靈魂は、有体的なものどもから離れるに従って、離在的な可知的なものをよりいっそう受け容れうるようになる、ということである。》

Et ex hoc causantur duae aliae differentiae. Una est *quod essentia substantiae compositae potest significari ut totum vel pars* Secunda differentia est *quod* S. Thomas, De Ente et Essentia, cap. 4, num. 20. 《そして、このことからして、他の二つの差異が生じてくる。第一の差異は、合成実体の本質は全体としても部分としても示されることができる、ということである。……第二の差異は、……ということである。》

(3) quod 節が目的語になる場合。

Rursus autem ascendentes dicimus, *quod [causa omnium] nec anima sit, neque mens, nec imaginationem, vel opinionem, vel rationem, vel intelligentiam habeat*. PG 3, col. 1046; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 5, Translatio Corderii. 《さらに上昇しながら、われわれはこう言う、万物の原因は、靈魂(人間)でもなく、知性(天使)でもない、また、表象や臆見や推理や知解をもたない、と。》

Gregorius theologus sermone tertio 《Theologiae》 suae dixit, *quod neque divinitas, nec ingenitum, neque paternitas substantiam Dei significant*. PG 3, col. 1050, 1. 4; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 5, Corderii Notae. 《神学者 Gregorius は、かれの『神学』の第三説話でこう言った、神性も生まれないことも父性も神の実体を意味しない、と。》
Alphorabus et Avempothe dixerunt, *quod intellectus noster cognoscendo quidditates sensibilibus ac materialibus substantiarum, abstractissime cognosceret quidditatem substantiae separatae*. PG 3, col. 1058, 1. 51; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《Alphorabus と Avempothe はこう言った、われわれの知性は、感覚的で物質的な諸実体の何性(本質)どもを認識することにより、分離実体の何性をきわめて抽象的に認識するだろう、と。》

Verumtamen Scotus tenet, *quod conceptus entis sit univocus et communis Deo et creaturis*. PG 3, col. 1054, 1. 42; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《しかしながら、Scotus はこう主張する、ens (存在するもの) という概念は神と被造物とに一義的であって共通である、と。》

Videtis ergo *quod hic error fuit sicut ibi*. PL 178, col. 1341 C; P. Abaelardus, Sic et Non, Prologus. 《それゆえ、あの個所のように、この個所にも誤りがあったことを、あなたがたは見出すであろう。》

Cyparissiotus ait, *quod neque integram de Deo cogitationem habere in hoc saeculo possumus*. PG 3, col. 1067, 1. 9; Epistola Ia S. Dionysii, Corderii Notae. 《Cyparissiotus はこう言う、神についての完全な認識をわれわれはこの世でもつことができない、と。》

Unde Cyparissiotus concludit, *quod Deus neque ex representatione naturali cognoscitur*. PG 3, col. 1067, 1. 23; Epistola Ia S. Dionysii, Corderii Notae. 《こうして、Cyparissiotus はこう結論する、神は自然的な表象によって認識されない、と。》

4) quod が非人称的受動態動詞と共に用いられる場合。

Ex his *certum censetur*, quod Deus a beatis clare cognoscitur. PG 3, col. 1055, 1. 12; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《これらのことから、神が浄福なひとたちによって明らかに認識されるということは確実と思われる。》

Unde *videtur*, quod, abstracta ab ipso esse, omni potentialitate, dependentia, privatione, et alia omni imperfectione ac finitate, resultet conceptus Dei absolutus ac proprius. PG 3, col. 1054, 1. 6; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《このことからつぎのことがわかる、すなわち、存在自体からいっさいの可能性・従属性・欠如・その他いっさいの不完全性や有限性が解き離されて、神の絶対的で固有な概念が結果として生じる、ということが。》

At his *obiicitur*, quod simili modo Deus posset dici lapis et lignum, quia est causa horum. PG 3, col. 1054, 1. 27; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《しかし、これらのこと（神と被造物について言われるいっさいのことは一義的に言われるという説）に対してこう反論される、神は類似した仕方でも（アナログアによって）石や木と言われえよう、なぜなら、神はこれらの原因であるから。》

Relinquitur ergo quod nomine mali significetur quaedam absentia boni. Et pro tanto *dicitur* quod malum neque est existens nec bonum. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 48, art. 1 cor. 《それゆえ、結局、悪という名称によって善の或る欠如が意味されるという結論が出てくる。そして、このかぎりにおいてのみ、悪は現存するものでもなく善でもないと言われる。》

Non autem potest *dici* quod essentia relationem significet quae est inter materiam et formam. S. Thomas, De Ente et Essentia, cap. 2, num. 4. 《ところで、本質が、質料と形相との間に存する関係を示している、とは言われえない。》

Unde in VII 《Physic.》 *probatur* quod motum et movens oportet esse simul. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 8, art. 1 cor. 《こういうわけで、『自然学』第七章において、動かされるものと動かすものが同時に存在しなければならない、ということが証明されている。》

Et ita *sequitur* quod cuius potentia intellectiva naturaliter est sublimior, clarius eum videat. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 12, art. 6, obiectio 3. 《このようにして、[神を] 知解する能力が自然本性的により高次なものは、より明らかに神を見るであろう、ということが帰結される。》

(5) quod が gerundivum の非人称的用法と共に用いられる場合。

Respondeo *dicendum* quod impossibile est in Deo esse materiam. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 3, art. 2 cor. 《以上に答えて、わたしはこう言うべきであるとする、神のうちに質料が存することは不可能である、と。》

Est autem ulterius *considerandum* quod omnis effectus convertitur ad causam a quo procedit, ut Platonici dicunt. S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 94. 《さて、さらに考察されねばならないことは、プラトン主義者たちが言うように、結果はすべて、それが進み出てきた原因へと転回する、ということである。》

Sciendum ergo est quod ens per se dicitur dupliciter: …… S. Thomas, De Ente et Essentia, cap. 1, num. 2. 《それゆえ、こういうことを知っておかねばならない、すなわち、存在するものはそれ自体としては以下のように二様の仕方で言われる、ということ。》

Et *notandum* quod ponit duo ex quibus habetur quod sacrae Scripturae sit maxime credendum. S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 21. 《また、つぎのことが注意さるべきである、すなわち、それによって聖書が最高度に信じらるべきであるとされるものの二つをかれ (Dionysius) が措定している、ということが。》

- (6) quod が非人称動詞と共に用いられる場合。

Ex his *liquet*, quod Deus nec naturali repraesentatione cognosci ab ullo unquam possit. PG 3, col. 1075, 1. 54: Epistola Va S. Dionysii, Corderii Notae. 《これらことから、神が自然的な表象によりどんなものによっても認識されえない、ということは明らかである。》

Unum enim nihil aliud significat quam ens indivisum. Et ex hoc ipso *apparet* quod unum convertitur cum ente. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 11, art. 1 cor.

《「一なもの」は、「分割されえない存在するもの」以外の他の何ものをも意味しない。まさにこのことから、「一なもの」が「存在するもの」と転換されるということが明らかにになる。》

Unde *manifestum est* quod Deus non est in genere sicut species. Et ex hoc *patet* quod non habet genus, neque differentias; neque est definitio ipsius, neque demonstratio, nisi per effectum. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 3, art. 5 cor. 《したがって、神が種として類のうちに存しないことは明白である。このことからして、神が類をもたないこと、もろもろの種差をもたないこと、神の定義が存しないこと、結果によるのでなければその論証が存しないこと、これらのことも判明する。》

Et ex hoc *contingit* quod est unus re et plures secundum rationem: quia intellectus noster ita multipliciter apprehendit eum, sicut res multipliciter ipsum repraesentant. S. Thomas, S. Th. Ia, q. 13, art. 4 ad 3. 《そして、(神が) 事実上は一でありながら概念上では多である、ということが生じるのは、もろもろの事物が神を多様な仕方では表現しているように、そのようにわれわれの知性が多様な仕方では神を把握するからである。》

Cum autem Deus sit ipsum esse per suam essentiam, *oportet* quod esse creatum sit proprius effectus eius. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 8, art. 1 cor. 《ところで、神は自分の本質によって存在そのものであるがゆえに、被造的な存在はかれの固有の結果でなければならない。》

Si autem perfecte aliquid cognoscitur, *necesse est* quod virtus eius perfecte cognoscatur. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 14, art. 5 cor. 《ところで、もし或るものが完全に認識されるとすれば、そのものの力が完全に認識されるのでなくてはならない。》

- (7) quod 節が他の名詞と同格に置かれてその内容を示す場合。

Similitudines illarum rerum quae magis elongantur a Deo, veriore nobis faciunt

aestimationem quod sit supra illud quod de Deo dicimus vel cogitamus. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 1, art. 9 ad 3. 《諸事物の似像は、神からよりいっそう隔たったもののそれであればあるほど、神はわれわれが神について言ったり考えたりするところのものを超えているという思いなしを、われわれにいっそう真なものにする。》

[Dionysius] tradit *differentiam* procedendi mysticae theologiae ab aliis scientiis theologicis, *quod* nimirum hae, dum varia de Deo tradunt et affirmant, v. g. bonitatem, veritatem, sapientiam, potentiam et caetera attributa, Deum quodammodo ornare et vestire videantur, et consequenter obtegere ac velare; e contra vero mystica theologia omnia haec de Deo negando et auferendo, multo verius et clarius nobis in semetipso Deum exhibere censenda sit. PG 3, col. 1027, l. 45; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 2, Corderii Notae. 《Dionysius は、神秘神学の進み方の他の神学からの差異を述べる、すなわち、たしかに他の神学は、神にかんしているいろいろなものを、たとえば、善性・真理性・叡智・能力・その他の属性を付与し肯定しながら、神を或る仕方ですり着せるように思われる、したがって、神を隠し覆うように思われる、しかし、これとは反対に、神秘神学は、神にかんするこれらすべてを否定し取り去ることによって、いっそう真に明瞭に、神をそれ自体においてわれわれに示すと見做されねばならぬ、ということ。》

Ex hoc potest accipi *regula magistralis quod* omnia nomina designantia effectum in creaturas, pertinent ad divinam Essentiam. S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 126. 《このことから、被造物への働きかけを指し示す名称はすべて神の本質に属している、という教導的な規則が受け容れられうる。》

- (8) ad+gerundivum の単数中性対格+quod 節。この場合、quod 節は、gerundivum に置かれる動詞の目的語になっている。

Dicimus Deum sapientem, *ad innuendum quod* in eo non sit insipientiae malum. PG 3, col. 1054, l. 17; Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii. 《非叡智という悪が神のうちに存しないことを知らせるために、われわれは神を叡智あるものと呼ぶ。》

- (9) quod 節が代名詞と appositio の関係に置かれ、前置詞なしに奪格に置かれる場合。

Hoc solum different [affirmatio et negatio], *quod* propius accedat ad veritatem qui dicit, Deus non est quod nos existimamus aut concipimus. PG 3, col. 1010, l. 30; Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1, Corderii Notae. 《肯定と否定とはただつぎの点でのみ異なっている、すなわち、神はわれわれが考えたり把握したりするところのものではないと言うひとは、真理へといっそう近く近付くであろう、という点で。》

なお、hoc は、[・][・][・][・]差異を示す奪格である。

Virtus divina se extendit ad alia, *eo quod* ipsa est prima causa effectiva omnium entium. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 14, art. 5 cor. 《神の力は、それがいつさいの存在するものの第一の産出因であるという仕方、自分自身を他のものどもへと拡げる。》

なお、eo は、方法・仕方を示す奪格である。

Eo sunt boni Angeli ab malorum angelorum societate discreti, quod hi in eadem voluntate bona manserunt, illi ab ea deficiendo mutati sunt, mala scilicet voluntate, hoc ipso quod a bona defecerunt. S. Augustinus, *De Civitate Dei*, XII, 9, n. 1; ML 41, 356. 《善い天使たちは、悪い天使たちの集団から、次のことのゆえに分離された、すなわち、前者は同じ善い意志にとどまり、後者はそれ（善い意志）から背き去ることにより、すなわち、悪い意志によって善い意志から背き去ったことにより変化してしまった、ということのゆえに。》

なお、eo は、原因・理由を示す奪格である。

(10) *quod* 節が代名詞と *appositio* の関係に置かれ、前置詞に支配される場合。

Dicitur autem aliquid corruptibile per hoc quod inest ei potentia ad non esse. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 75, art. 6 ad 2. 《だが、非存在への可能態が或るものうちに内在しているということによって、そのものは滅びうると言われる。》

Vis rationum D. Thomae in hoc fundatur, quod nimirum cognitio fiat per formam seu speciem et similitudinem cogniti. PG 3, col. 1054, 1. 54; *Myst. Th. S. Dionysii, Quaestio Mystica Corderii*. 《博士 Thomas の推論の力はずぎの点に基礎づけられている、すなわち、確かに認識は、認識されるものもっている形相すなわち形とその似像とによって生じる、ということに。》

Et sicut semper crescit desiderium vivendi, ita cibus vitae semper comeditur, absque hoc quod in naturam comedentis convertatur. Nicolaus, *Doc. Ig.*, III, 12. 《また、生きることの希求がつねに増大するように、そのように生命の食物はつねに食べられる、だが、この生命の食物が食べるひとの本性に転回するということはない。》

Secundum hoc simpliciter aliquid dicitur ens, secundum quod primo discernitur ab eo quod est in potentia tantum. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 5, art. 1 ad 1. 《或るものが端的な意味で「存在するもの」と呼ばれるのは、何よりもまず、単に可能態においてあるところのものから区別されるかぎりにおいてである。》

Secundum ergo quod ea quae sunt veteris legis, significant ea quae sunt novae legis, est sensus allegoricus. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 1, art. 10 cor. 《旧約の法に属していることがらが新約の法に属していることがらを表示するかぎりにおいて、譬喩的な意味がある。》

この例では、代名詞が省略されている。

Ex duobus notificatur aeternitas. Primo, ex hoc quod id quod est in aeternitate, est interminabile, idest principio et fine carens. Secundo, per hoc quod ipsa aeternitas successione caret, tota simul existens. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 10, art. 1 cor. 《二つのことから永遠性は知られる。第一には、永遠性において存するところのものが限りのないものであること、すなわち、始めと終りとを欠いているものであることから。第二には、永遠性そのものが継続を欠いて全体として同時に存在することから。》

Ad hoc quod aliquid sit perfectum et bonum, necesse est quod formam habeat, et ea quae praeexiguntur ad eam, et ea quae consequuntur ad ipsam. S. Thomas, S. Th. Ia, q. 5, art. 5 cor. 《或るものが完全であり善であるためには、それが形相をもつこと、その形相のために予め要求されるものどもをもつこと、その形相に従ってくるものどもをもつこと、これらのことが必要である。》

Cum relatio requirat duo extrema, tripliciter se habere potest *ad hoc quod* sit naturae et rationis. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 13, art. 7 cor. 《関係は、二つの項を要求するがゆえに、項が自然界の事物であるか概念の世界の事物であるかに応じて、三様の仕方で存しうる。》

Et tunc veritatis aspectus fertur in mentis caliginem et altius elevatur et profundius ingreditur, *pro eo quod* excedit se et omne creatum. S. Bonaventura, De Triplici Via, cap. 3, num. 13. 《そしてそのとき、真理の注視は、自分といつさいの被造物とを超え出るにしたがい、精神の闇のうちへと運び入れられ、いつそう高く揚げられ、いつそう深く歩み入る。》

Si aliqua nomina dicuntur de Deo ex tempore *propter hoc quod* important relationem ad creaturas, eadem ratio videtur de omnibus quae relationem ad creaturas important. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 13, art. 7, obiectio 3. 《もし若干の名称が、被造物への関係を含意しているというこのことのゆえに、時間的な仕方で神について語られているとするならば、被造物への関係を含意するいつさいの名称についても同じ推理が見られなくてはならない。》

つぎの例は、代名詞が省略された場合の例である。

[Deus] habet omnes perfectiones quae sunt in omnibus generibus, *propter quod* perfectum simpliciter dicitur. S. Thomas, De Ente et Essentia, cap. 5, num. 24. 《神は、端的に完全なものであるがゆえに、どんな種類のもののうちに存する完全性をもすべてもっている。》

これに似たものに、Caesar の De Bello Gallico に見出される *propterea quod* 節がある。

Horum omnium fortissimi sunt Belgae, *propterea quod* a cultu atque humanitate provinciae longissime absunt. Caesar, De Bello Gallico, I, 1. 《これらすべてのうちで、ベルガエ人が最も勇敢である。それは、プロウインキアの文化と教養から最も遠く離れているからである。》

なお、De Bello Gallico のうちには、*quod* だけで理由を表わす場合がある。

Postridie eius diei, *quod* omnino biduum supererat cum exercitui frumentum metiri oporteret, et *quod* a Bibracte, oppido Haeduorum longe maximo et copiosissimo, non amplius milibus passuum duodeviginti aberat, rei frumentariae prospiciendum existimavit. Caesar, De Bello Gallico, I, 23. 《その翌日、軍隊に穀物の割り当てをすまさねばならぬ日がまる二日しか残っていなかったのも、また、ハエドウィー族のなかで最も大きくしかも最も豊かな町ビブラクテから十八哩以上は離れていなかったのも、かれ(カエサル)は穀物の供給をしなければならぬと考えた。》

無論, *quod* の同じ用法は, 中世以降においても見出される。

Ultra terminos populus sine periculo ascendere non poterat, quod non esset capax tantae puritatis, neque divinae lucis radios e propinquo sustinere posset. PG 3, col. 1011, l. 10; *Myst. Th. S. Dionysii, cap. 1 Corderii Notae.* 《(イスラエルの)民は, 危険を伴わずに境界を越えて登ることができなかった, なぜなら, 民はそれほどまでに純化されえなかったであろうし, また, 神の光箭を近くから見るに耐ええなかったであろうからである。》

- (11) *quod* 節が他動詞の過去分詞と結合して *ablativus absolutus* を構成する場合。

Videtur quod omnia quae apparent in mundo, possunt compleri per alia principia, supposito quod Deus non sit. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 2, art. 3, obiectio 2. 《この世界に現象するものはすべて, 神が存在しないと想定されたとしても, その他の原理によって充たされうる, と考えられる。》

Dato enim quod esset aliquod corpus infinitum secundum magnitudinem, utpote ignis vel aer, non tamen esset infinitum secundum essentiam. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 7, art. 3 cor. 《たとえ大きさのうえで無限な或る物体が存するとしても——例えば, 火とか気とかがそれだとしても——, それが本質上無限であることにはならないであろう。》

Et ideo, habito ex praemissis quod nulla creatura est infinita secundum essentiam, adhuc restat inquirere utrum aliquid creatum sit infinitum secundum magnitudinem. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 7, art. 3 cor. 《それゆえ, どんな被造物も本質上無限でないということが前述のことからえられたにしても, なお, 或る被造物が大きさのうえで無限であるかどうかを探究することは残る。》

Dato quod tempus semper durat, tamen possibile est signare in tempore principium et finem. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 10, art. 4 cor. 《たとえ, 時間が永遠に持続するとしても, 時間のうちに始めと終りとをしるすことは可能である。》

- (12) *quod* が *puta, sicut* と共に例文を引き出すために用いられる場合。

Eandem enim conclusionem demonstrat astrologus et naturalis, puta quod terra est rotunda. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 1, art. 1 ad 2. 《天文学者と自然学者はそれぞれ同じ帰結を論証する, 例えば, 「地球は円い」という帰結を。》

Plato enim posuit omnium rerum species separatas; et quod ab eis individua denominantur, quasi species separatas participando; ut puta quod Socrates dicitur homo secundum ideam hominis separatam. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 6, art. 4 cor. 《プラトンは, あらゆる事物の離存的な種どもを考えた, そして, 個体は離存的な種どもをいわば分有することによってそれらに基づいて呼ばれるのであると考えた, 例えば, ソクラテスが, 人間の離存的なイデアに基づいて「人間」と言われるように。》
Et sic nihil prohibet aliqua privative dicta de Deo praedicari; sicut quod est incorporeus, infinitus. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 11, art. 3 ad 2. 《このようにして欠如的に言われた或る言葉が神について述語されることを, ——例えば, 「神は非物

体的である」とか「神は無限である」というように言われることを——何ものも妨げない。》

- (13) quod 節が比較の項を示すために用いられる場合。

《Ridere》dictum de prato, *nihil aliud significat quam quod pratum similiter se habet in decore cum floret, sicut homo cum ridet, secundum similitudinem proportionis*. S. Thomas, S. Th., Ia, q. 13, art. 6 cor. 《「笑う」ということが草原について言われる場合、対比の類似性に基づいて、人間が笑う場合と類似した仕方で、草原が花咲くときに華麗な状態にあることを表示しているにほかならない。》

- (14) quod が ita, adeo, talis などと相関的に用いられる場合。

Talis autem invenitur habitudo materiae et formae, quod forma dat esse materiae. S. Thomas, De ente et Essentia, cap. 4, num. 19. 《ところで、質料と形相との間には形相が質料に存在を与えるという関係が見出される。》

Quamvis actu quisque in gradu esse possit tali, quod in maiori secundum se actu …… esse non possit; …… Nicolaus, Doc. Ig., III, 12. 《だれしも、自分自身の力によってそれ以上高い段階には現に在りえないほどの（最高の）段階に現実的に在りうるとしても、……。》

Tunc patet correlationem influentiae talem esse, quod una [stella] sine alia [stella] esse nequit. Nicolaus, Doc. Ig., II, 12. 《その場合、その影響（地と太陽と月との相互にたいする影響）は、一方の星が他方の星なしには存しえないというような相互関係にあることは明らかである。》

Omnia, quaecumque sensu, ratione aut intellectu apprehenduntur, intra se et ad invicem taliter differunt, quod nulla est aequalitas praecisa inter illa. Nicolaus, Doc. Ig., I, 4. 《感覚・理性あるいは知性によって把握されるものは何であれすべて、相互のあいだで、相互にたいし相異なっていて、それらのあいだには何ら厳密な相等性が存しないほどである。》

Ita est unione ineffabili hypostatica, quod …… non possit altius et simplicius uniri. Nicolaus, Doc. Ig., III, 12. 《（イエスは、）それよりも高度にそれよりも単純には合一されえないほどに、言い表わしようもない基体的な合一によって存在する。》

Hic certe ita esset homo quod Deus, et ita Deus quod homo. Nicolaus, Doc. Ig., III, 3. 《このものは、たしかに、神であるという仕方で人間であり、人間であるという仕方で神である。》

Aeterna quies, adeo perfecta, quod perfectior esse non possit. Nicolaus, Doc. Ig., III, 12. 《それよりも完全でありえないほどに完全な永遠の静穏。》

Non tamen, sic utimur huiusmodi signis in cognitione divinorum, quod in eis mens nostra remaneat, nihil ultra huiusmodi Deum existimans. S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 69. 《しかし、われわれは、神的なものの認識において、こうしたしるしを、そのうちにわれわれの精神がとどまって神をこうしたものを超えるどんなものともみなさない、という仕方で使用することはない。》

Et ne aliquis crederet sic Deum esse super omnia remotum ut non solum non cognosceretur, sed *quod nec etiam cognosceret quae infra se sunt*, S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 77. 《さらに、神が、認識されることがないばかりでなく自分の下位にあるものどもを認識することもないほど万物を超えて遠ざかっている、とひとが信じないように……。》

Est *intantum* ille circulus unissimus, *quod diameter est circumferentia*. Nicolaus, Doc. Ig., I, 21. 《あの円（無限な円）は、直径が円周であるほど、それほど最大度に一である。》

Tanta est ibi identitas, quod omnes etiam relativas oppositiones antecedit, quoniam ibi aliud et diversum identitati non opponuntur. Nicolaus, Doc. Ig., I, 21. 《そこには（無限な一性には）あらゆる相対的な対立よりも先に進むというそれほどの同一性が存する、なぜなら、そこにおいては（無限な一性においては）「他なもの」と「相異なるもの」とが同一性に対立することがないからである。》

(15) *quod* が *idem* と共に用いられる場合。

Hierarchia *idem* est *quod* sacer principatus. S. Thomas, Expositio in Div. Nom., Exp. 64. 《「教主」とは、「聖な頭主」と同じ意味である。》

Idem pulchrum esse *quod* bonum perspicuum est. Nicolaus, De Non Aliud, cap. 14. 《美が善と同じものであることは明白である。》